

介する「精霊」としての風の存在論、あるいは神学が、洋の東西を跨ぐ全球的な比較文化的視野で、いまこそ期待されているのかもしれない。

議論は懇親会会場に移して続けられた。地下鉄サン・ポールの駅近く、「二十のワイン」と題する若い日本人経営の小さな店。画廊を兼ねており、パリ在住の日本人写真家、清真美（きよし・まみ）による日本の風職人に取材した写真の展覧会が開かれていた。同じ作品展は、日文研でも、セシル・ラリ氏の evening seminar に併せ、実施が予定されている*。

（国際日本文化研究センター教授）

（二〇一九年一月六日稿）

* The Kites of Shirone - How to Make a Small City Known Worldwide
は二月七日に実施された。

「近代中国革命の思想的起源——日本からの建国思想の受容を中心に」第一回共同研究会の感想

楊 際 開

二〇一八年四月二八―二九日に亘って、小生の主催による共同研究会「近代中国革命の思想的起源——日本からの建国思想の受容を中心に」の第一回研究会が行われた。初日は戦争史家の姜克實氏と中国外交史家の岡本隆司氏に基調講演をお願いしたので、お二人の講演の主旨や意味を中心に感想をしるしたい。

初日には姜克實氏と岡本隆司氏による基調講演が行われた。まずは姜克實氏の講演の「近代化におけるナショナリズム、アジア主義の位相——日本のアジア主義と革命」という演題における問題提起を取り上げたい。姜氏から見れば、日本のアジア主義と近代中国革命は、いわば「国家的情念」から生まれた双子のような関係にあるようだ。「アジア主義には近代と伝統にまたがる二つの側面があり、近代の側面（ナショナリズム）は中国の革命、近代国家の成立をもたらしたが、伝統的側面は、戦前の「大アジア主義」的国家関係をつ

くり、またアジアにおける市民社会の形成を妨げ、戦前日本の天皇制国家と、今日の「特色ある社会主義」の社会基礎を孕んだ」という。確かに日本のアジア主義は「政治主義」（植村和秀『丸山真男と平泉澄——昭和期日本の政治主義』柏書房、二〇〇四年参照）の延長にあり、中国現代国家の政治的起源と考えてよいだろう（趙軍『中国における大アジア主義』「聯日」と「抗日」のあいだ』ミネルヴァ書房、二〇一八年参照）。

楊度の鉄血（帝国）主義、梁啓超の大民族主義及び孫文の大アジア主義は、その象徴的な存在である。改良派と革命派の立場の違いは、満州王朝という国体を温存するのか、漢民族の「国体」をつくるのかにあった。いずれも彼らの明治日本観と関わっている。東アジアの政治史は日中間の政治的敵対関係を存在論的にとらえてきた（衛藤藩吉『東アジア政治史』東京大学出版社、一九六八年参照）。アジア主義が中国革命と近代国家の成立をもたらしたという姜氏の指摘は、実際に満・蒙・蔵・苗・回を合一する「大民族」を唱えた梁啓超の果たした役割を思えば、示唆に富むものである。これは中国現代国家の政治的起源という別の研究課題になる。梁啓超の大国民主義と浮田和民の西洋レンズの大国民主義と

の「思想連鎖」的な関係が考えられよう。日本発信の「大アジア主義」は日清・日露戦争を経て日本国民全体の思想的傾向となった。

マルクス史観は「天皇制」を標的にし、「天皇制」を無くさない、自説が成り立たなくなる。対してアンチ・システム論のグローバル史観は「天皇」を「制」＝システムと切り離してグローバル性の出発点としてその存在理由を評価する。明治維新後の廃藩置県は中国の郡県制の最後の到達点として、中国式の君主主権を人民主権に転換させる契機が含まれている。明治維新後、伊藤博文はシュタインなどの立憲思想を利用して、天皇にキリスト教の代理機能を付与しようとし、後の丸山真男の近代主義的な政治学を生み出したわけだが、解釈次第で、天皇の意味は、太平天国のようなキリスト教受容に對峙する東アジア文明の存在論的な砦ともなり得る。近代日本は太平天国後、清朝中国との秩序再建の競争に登場したのである。

つまり神の国の発見は、もう一つの東アジア文明の精神の発見でもある。そもそも吉田松陰は太平天国の衝撃を受け、西洋レンズの帝国観から脱出して、東アジア文明規模の天下観に目覚めた。太平天国は東アジアにおいては最初のアン

チ・システム論のグローバリズム運動である。松陰の道徳的エネルギーは、西洋の衝撃から在来文明の存在論的基盤を保守するために生まれたものである。それを法原たる天皇に外見化・礼儀化して、東アジア文明の政治的客観化の道が開かれたのである。漢字や儒教の天下観念は彼にとって自己の存在証明であり、アイデンティティでもあった。幕末から維新を推進してきた幕末志士の道徳的エネルギーこそ、東洋文明の存続を可能にしたものだった。その出発点がアンチ・システムである。つまり明治維新を生み出した動機は幕府統制からの解放だけではなく、在来文明を保守することにもあった。しかし、このアンチ・システム運動は日清戦争をへてシステム運動に変わっていく。近代の戦争は革命に起源し、やがて国家統一の名義で、道徳強制が強いられていく。

東アジアは皇帝権と文（書き言葉）との世界だけではなく、「地方」統治権と言（話し言葉）との世界でもある。東アジア秩序において日本、ベトナム、朝鮮、チベット、蒙古、ウイグル自治区、満州、各省と東南アジア諸国はほぼ同格だが、明治日本をはじめ、西洋化されていくうちに、東アジアの文明全体が存在論的な危機に晒されはじめた。ここから東アジアの王道を守るための大東亜戦争論が出てくる。覇

道日本に王道の精神を読み取った中国近代革命が、その思想的起源の日本を自らの来歴として語るのと同じ問題である。

「伝統」と「近代」とは二分法的な対立関係ではない。また「任侠」の挫折から国家・国民意識の誕生という姜氏の論法も、吉田松陰などの幕末思想と辛亥革命との接点を念頭に置いていない。国家建設にも「任侠」的な道徳的エネルギーが必要である。近代的国家・国民意識よりも、吉田松陰的な汎アジア的天下思想と「大アジア的」国家関係との違いに着目する必要もある。 「市民」を論ずるとき、「天下」を管理する「公民」（鈴木正幸など編『比較国制史研究序説』柏書房、一九九二年参照）も考慮に入れなければならない。例えば、小路田泰直は「日本の支配層はその主権の創造を、アジア的「三元性」の頂点に立つ教養官僚制の文化的同化力の読みかえに託した」（同書、三二五頁）と主張するが、吉田松陰は柳宗元を道統に入れることにより、朱子学的道統観を政治学的に再解釈した。士道（官僚・学者）に近代的な公民の意味合いを付与し、「三元性」を「二元性」にすることではなく、「二元性」との機能的連続性を保ちながら、その道統的な中味を道徳から政治に変えたのである。

徂徠学的な「外」的・政治学的思考は山陽・松陰を経て

「内」的に道徳化され、行動主義に走り、明治維新後、近代国家思想の土俵の上に王覇論として再構成されていくが、韓非子の思想は専制擁護から社会統合にその現代的意味が見出された。山陽思想と幕臣との関連という濱野靖一郎氏の指摘も大変興味深い。幕臣も明治維新の立役者なのである。昨今、議論の土俵がグローバルイズムに変わっているなかで、人権思想を共通のベースとして、山陽や松陰による日本発信の孟子学的仁義論は地球規模の「天下」に関する言説になりうるのではないか。ここから岡本隆司氏のご講演の意味が出てくる。つまり、翻訳概念は目的ではなく、在来文明自己保存の手段と考えてよい。

東洋の「近代」はかつて、社会のコンテクストを西洋流の近代国民国家に移し替えた。いまもう一度近代国家のコンテクストをアンチ・システム論のグローバルイズムに移し替える、日本における宗教的な経験が蘇ってくる。例えば、田尻祐一郎は富士講についてこう語っている。「伝統的な神話に権威づけられた天皇ならぬ、富士山を中心とし米（菩薩）を基軸とする新しい神話の「うつりはじめ」としての天子を日本の中心に位置付けた」（源了圓・玉縣博之編『国家と宗教——日本思想史論集』思文閣出版、一九九二年、三二六頁）。

民間宗教は国家神道と異なる理由で天皇を支えている。ここにわれわれは清朝体制に替わる日本発信のアジア秩序の新たな胎動を読み取ることができないだろうか。問題は権力による職業の独占なのか、それとも職業の由来を裏付ける民間宗教なのか（深谷克己『民間社会の天と神——江戸時代人の超越観念』第一章、啓文舎、二〇一五年参照）という力と理念レベルの問題である。これは最高権力たる天子像の転換——権原から法原に関わるパワーシフトの問題でもある。日本はその達成——政治と宗教との分離により、東アジア法文化圏における特別な貢献を成し遂げている。

植村和秀氏は、民間宗教信仰のレベルで、特に石原莞爾の『世界最終戦論』の宗教的由来を明らかにしている。植村氏は在来文明の存在理由を「文」ではなく、「武」で決着するという石原莞爾の『世界最終戦論』の立場を披露している。東亜の王道を守るための戦争史観は、山東曲阜に駐屯した日本軍がなぜ孔子廟、孟子廟を守り、礼拝をしたかの説明になる。林房雄が提起した東亜百年戦争史観には中国近代革命が始終存在している。廃藩置県から日清戦争、辛亥革命、北伐、満州事変、そして中国共産党による制覇という流れの根底にあるのは、システム論的な進歩史観である。満州事件に

よる自治から建国への転換は主権による縄張り意識が形成されたのである。友と敵の分かれ目は日清戦争である。

水林彪氏の問題提起に応えるためにも日本をも含む東アジア文明という視点が必要である。水林氏はマルクスの用語を援用し、明治維新が社会（市民）と国家（公民）との二元性を作り出したと見ているが、実際に近代日本の「公民」は帝政中国の「公民」とは内的結合関係を持っている。日本的な公民の政治倫理を根拠付けたのは吉田松陰に由来する宗教に寛容な柳宗元の人役説（徂徠の「苦厄介」説）である。日本のグローバル性は東アジア文明と切り離しては語れない。中国近代革命の道徳的エネルギーは日本由来である。

全体の感想として、太平天国、尊皇攘夷運動、明治維新、近代中国革命、北伐、満州事変、日中戦争はウエイスタン・インパクトに対して、東アジアのアイデンティティを求める性格のものだといえよう。

（国際日本文化研究センター外国人研究員）

基礎領域研究「英文日本歴史研究書講読」を開講・担当して

牛村 圭

コミュニケーション英語隆盛のなかで

巷間にはネイティヴ・スピーカーによる「コミュニケーション英語」教授を掲げる外国語学校がかなりある。大学のカリキュラムでも、従来の Listening & Speaking に加え Comprehensive などと銘打った英語科目が目につく。喜ばしい現状と思う。うらやましくさえ感じる。顧みれば自分が大学の教養課程に学ぶ学部学生の折、ネイティヴ・スピーカーによる英語の授業をとりたくても、そういう先生はきわめて少数派だった。せいぜいできることはといえば、ラジオの英語会話番組をカセットテープに録音して繰り返し聴くことだった。それを思えば、隔世の感をおぼえる。

だが、その一方で気がかりなこともある。それは、大学の授業で訳読を中心に据えた英文精読のクラスがかなり減じてきていることに他ならない。高等学校でも、日本人教師にも日本語ではなく英語を使って英語を教授することが推奨さ